

英語の中間構文と連結的知覚動詞構文の認知的／概念的連続性：
「感性表現」という立場から
A Cognitive Analysis of the Contiguous Relationship
between Middle and SOUND-class Verb Constructions:
A Kansei Informational Approach.

板垣 浩正
ITAGAKI Hiromasa

大阪大学 [院]
Osaka University
u322908j@ecs.osaka-u.ac.jp

Abstract

This paper aims to reanalyze and reinforce the contiguous relationship between Middle and SOUND-class verb constructions in English. Although the contiguity of the two constructions has been discussed in previous studies, these researches only showed the commonality of the constructional characteristics, and scarcely concentrated on the semantic and conceptual disparities. They could not, therefore, reveal what contiguity is in the constructions. This paper focuses on the constructional differences and shows that the two constructions have a cognitive and conceptual continuum in terms of Affordance and “Kansei,” which is identified with the interactional property in user’s cognition. It also attempts to suggest a new method of describing language constructions, since this method provides an analysis of the constructions with conceptual foundations and motivations in accordance with Ecological psychological and Cognitive psychological paradigms.

Keywords:

Middle construction (中間構文), SOUND-class verb construction (Copulative Perception Verb’s Construction: 連結的知覚動詞構文)¹, Interactional property (相互作用の属性), Affordance (アフォーダンス), Kansei (感性)

1. 中間構文と CPV 構文

英語には中間構文と呼ばれる[NP - V - (Adjunct)]という形式で、主語指示物の一般的属性を表す構文が存在する。例えば(1a)は、主語である「車」の「運

転のしやすさ」が表現される。多くの場合述語動詞が能動形で表され、その目的語名詞が主語となる (Fellbaum 1985 etc.)。

- (1) a. [This car] [handles] [smoothly] .
動作対象 動詞 副詞句
b. Her books translate well.
c. The sheets washed easily.

(Quirk et al 1985: 744)

中間構文は、(2a)に示すように動作主を by 句などで明示できないが、その存在が強く含意されていると言われ、(1a)は(2b)に言い換えられる。また、ほぼ義務的に副詞(句)を伴うという特性も有しており、副詞を省略した(3)のような中間構文は普通容認されない(Fellbaum 1985, 谷口 2005: 158-159)。

- (2) a. *This car handles smoothly by everybody.
b. People, in general, can handle this car smoothly.
(3) a. *This car drives.
b. *This book reads.

一方(4)は、義務的に補語を伴い、主語の状態や属性を表す知覚動詞の用法で、連結的知覚動詞構文 (Copulative Perception Verb’s Construction: 以下 CPV 構文)と呼ばれている。CPV 構文の特性として、

¹ この構文は他にも呼び名が様々な存在するが、本稿では「連結的知覚動詞構文」という語を用いることにする。

受動態のような形態変化なしに知覚対象が主語に置かれる点が挙げられる。また義務的に補語を選択するため、(5)のような補語の省略は容認されない。さらに、動詞の行為を行う主体（この場合、見ている人物）が文中に明示されなくとも、(6)のように総称的人物あるいは話者がその行為を通じて属性判断したことが理解される(谷口 2005: 213-216)。

- (4) a. [John] [looks] [happy].
知覚対象 動詞 補語
b. It sounds reasonable.
- (5) a. *John looks.
b. *It sounds.
- (6) He looks happy to {everyone / me}.

以上より、二つの構文は共通した特性を有しているといわれ、両構文は「並行している」とし、その構文間の意味的・認知的「連続性」を追求する研究が近年認知言語学において取り扱われている。しかし、両構文が具体的にどのように「連続的」であるのか先行研究では明らかになっていない。本稿は、先行研究の分析に欠けていた両構文における差異に着目することで、両構文の連続性を探求する。また「感性」という概念を援用し、構文の基盤となる知覚・認知レベルでの連続性を検証する。

章構成は以下の通りである。まず2章にて二つの構文の先行研究を概観する。前半で言語事実を中心に据え、後半では本多(2005)などの認知的動機づけを提出した研究を中心に扱う。続く3章で、構文間の差異に着目することで先行研究の問題点・不足点を浮かび上がらせる。ここまでの議論を通じて、4章は両構文の並行性や連続性を改めて講じる。そして、認知的動機づけとして不十分であった生態心理学的言語分析に、「感性」という概念を補充させることで、両構文の連続性を改めて主張する。これは5章で扱い、6章のまとめに入る。

2. 先行研究

2.1. 構文間の形式的・意味的特性

前章の概説を踏まえて、谷口(2005)は、中間構文

と CPV 構文は共通した(7)の特徴を帯びる言語現象であると述べる。

- (7) a. 使用される動詞にとって本来目的語となる項が形態変化なしに主語になる
b. 動詞が表す行為が文中に現れていない動作主・知覚経験者によって為されることで、その主語の属性・状態を評価する
c. 動詞に後続する付加詞や補語がほぼ義務的に伴う

先行研究では、(7)に加えて「並行している」ことを証拠立てる事例をいくつか挙げている。(8)は‘eat’, ‘read’など知覚動詞ではないにも関わらず、形容詞の補語が伴っている点で、CPV 構文と中間構文との境界的な表現とされる(谷口 2005, 本多 2005)。また(9)は、連結的知覚動詞‘sound’と中間動詞‘read’が比較構文で並立されている。この事例は両構文が連続性の下に生じていること、そして同質のものとして捉えられていることを示すという(本多 2005)。

- (8) a. The cake eats short and crisp.
b. This book reads interesting.
(Horton 1996: 329, 谷口 2005: 247)
- (9) In speech that sounded much better than it reads...
(O’Grady 1980: 59 (下線は筆者による))

2.2. アフォーダンス知覚による構文分析

構文の動機づけに関する論考を行った本多(2005 etc.)は、生態心理学の知見を応用し、知覚メカニズムに基づいて、中間構文と CPV 構文の並行性を主張した。具体的には、二つの構文は(10)で示される知覚経験に動機づけると捉えた(本多 2005: 93 より)。

- (10) a. 述語動詞は探索活動を表す
b. 動詞句は主語の指示対象が持つアフォーダンスを表す
c. 文全体として、探索活動の結果生じる知覚者・行為者にとっての対象の見えを表現している

- d. 知覚者・行為者は明示されない場合エコロジカルセルフのレベルで捉えられている

(10)における各用語について簡潔ながら確認しておく。(10a)における探索活動とは、環境への知覚を成立させる知覚者の能動的な活動を指す(本多 2005: 50)。(10b)のアフォーダンスとは、環境の中に実在する、知覚者にとって価値ある意味や情報のことである(Gibson 1979)。より具体的には、環境の中のもの知覚者に提供する行為の可能性である(本多 2005: 56)。生態心理学では、環境は生物にとって豊富な意味や価値に満ちており、その価値(アフォーダンス)を、動物は能動的な活動(探索活動)を通じて知覚すると考える。従ってアフォーダンスは、環境と動物との両者に関連し相補性を含意する。エコロジカル・セルフとは、環境の情報を知覚することで同時に知覚される自己のことである。本多はエコロジカル・セルフで言語化された時、知覚者の「見え」に、その知覚者本人の姿は入っていないため、記号化されないと述べる。「見え」とは、対象が知覚者にとってどのように立ち現れるか、ないしは対象がどのように経験されるか、を捉えた術語である(本多 2004: 136)。

注意すべきは、アフォーダンスは知覚者の欲求等で左右される主観的なものではないということである。例えば、食欲が満たされた人物でもリンゴの「食べられる物」だというアフォーダンスは知覚される。つまり、アフォーダンスは動物の欲求に左右されない「公共的」なものとしてされる(佐々木 1994)。

このような視点から、中間構文と CPV 構文は共通して次の(11), (12)のように、知覚のメカニズムに動機づけられた形でパラフレーズできると本多は主張する。ゆえに本多(2005)は、中間構文および CPV 構文は知覚経験を表す言語表現であると提案する。

- (11) a. Bureaucrats bribe easily.
b. 役人というのは、実際にやってみれば

(買収してみれば)わかる(確認できる)ことだが、簡単にできるものだ。

- (12) a. This flower smells sweet.
b. この花は、においを嗅いでみると、甘いにおいがする。

(本多 2005: 68, 75)

3. 先行研究の問題点

3.1. 言語現象から見る並行性の限界

しかしながら、二つの構文が統語上、意味上全くの同質であるとは言い切れない。本章において、両構文の差異に着目することで、構文間の相違点と共通点を明瞭にさせようと思う。(13), (14)は、二つの構文の動詞に続いて共起する品詞の容認性に差が生じている。すなわち中間構文では形容詞と共起されにくいし、CPV 構文では副詞とは共起するのが難しい。² 加えて(15)の対比から分かるように、「ほぼ」義務的に伴う付加詞・補語について、中間構文は付加詞が伴わなくとも許容できることもあるが、一方で CPV 構文に後続する補語は必須である。³

- (13) a. This wine drinks {?*sweet / sweetly}.
b. Japanese cars drive {??easy / easily}.
(中村 2010: 447, (13b)は作例)
- (14) a. The flowers smell {sweet / ?sweetly}.
b. The food tastes {marvelous / ?*marvelously}.
(Quirk et al. 1985: 407-408)
- (15) a. (of a cheese) It slices, dices, and grates.
(Yoshimura and Taylor 2004: 293)
- b. * John looks.

他に、中間構文は一般的傾向として、過去形や進行形では容認されないことが多い一方、CPV 構文は時制や相に自由が効く。この違いは、中間構文が一般的属性を指示するのに対して、CPV 構文は一般的属性の他に、特定の事態を表現できるという特徴の違いに置き換えられる。

² (13a)の動詞 drink は対象物の結果を示さない摂取行為動詞であるため、コンテキストを与えないと容認されないとする先行研究も多い。(谷口 2005, etc.)

³ ただし、'smell'は、補語を伴わなくても容認できる('It smells.'). この場合、「嫌なにおいがする」という解釈になる(Dixon 2005: 139)。

- (16) a. *This car drove easily yesterday.
 b. *This book is reading easily.
 (谷口 2005: 174)

- (17) a. Jane sounded scared.
 b. The teacher is deliberately sounding angry.
 (Gisborne 2010: 251, 265)

属性評価に対する事実性の打消しに関しても隔た
 りが見られる。中間構文は、一般的に総称的解釈と
 されるため、(18)のように中間構文に続けて打消し
 を用いることができない。ところが、CPV 構文の
 (19b)は後続して打消す表現を用いても問題ない。
 (19a)は推論を含まないため極めて不自然だが、
 (19b)では話者の判断・推論が含まれるため容認でき
 るのである。ここに中間構文の普遍的属性と CPV 構
 文における個人的見解による判断という意味的差異
 が浮かび上がる。

- (18) *This book reads easily, but I can't (read it).
 (Ackema and Schoorlemmer 2006: 142)
 (19) a. *This food smells spicy, but it's bland.
 b. He sounds foreign, but he isn't.
 (Gisborne 2010: 249-250)

3.2. アフォーダンス知覚の限界

本節では、CPV構文をアフォーダンス知覚で分析
 することに限界が生じ、厳密には不十分であることを
 示す。まず、CPV構文が知覚経験を表すという提
 案の限界を指摘する。前節の(19b)で推論を含むCPV
 構文の用法を示したが、(20)のようなCPV構文は、
 まだ知覚していない明日の天気を推測する表現であ
 るため、知覚経験を基盤としているとは言い難い。

- (20) (I've seen the forecast and) tomorrow's weather
 looks fine. (Gisborne 2010: 245)
 (21) a. Judging from her letter, she looks to be the best
 person for the job.
 b. ?? Judging from her letter, her guitar looks (to be)
 gentle tones.
 (谷口 2005: 246, (21b)は作例)

(20)が知覚経験による表現であるならば、テレビ
 などを通じた視覚経験から明日の天気「見え」を
 表していると考えられるかもしれない。だが(21)に
 おいて、視覚を通じて手紙の情報を知覚しているに
 も関わらず、'look'を用いた(21b)がかなり容認しに
 くいことから、少なくとも全ての CPV 構文が知覚
 経験のみを基盤にしているとは言えないだろう。

また CPV 構文の述語動詞の動機づけに探索活動
 を含むという主張に対しても疑問を呈したい。本多
 (2005: 76, 89)は動作主性が低く、能動的な行為に相
 当する部分を意味構造に含んでいない動詞は CPV
 構文に現れないと主張する。確かに(22)のように動
 作主性の低い動詞は CPV 構文に現れない。

- (22) a. *John sees happy. (中村 2010: 438)
 b. *That hears good. (谷口 2012: 187)

しかし、人を動作主に取りえない'sound'が聴覚の
 CPV 構文として成立することを説明できない(徳山
 2013: 253)。さらに(23b)は、(23a)のように補語を伴
 う動詞'act'が CPV 構文と並立している事例である。
 重要なのは'act'という非能格動詞は、知覚者の動作
 主性を含まず、探索活動を表さないことである。な
 ぜならば(23b)の動詞'act'は、中間構文や CPV 構文
 とは異なり、知覚者ではなく主語対象の活動を描い
 ているからである。(9)を提示した際の本多(2005:
 76-77)による議論に則れば、(23b)は CPV 構文を成
 立させる動詞が探索活動を表さない動詞と同質と捉
 えられていることを示す証拠となる。このような例
 は、動詞'behave'を用いた(23c)のように、数は多く
 ないものの存在する。

- (23) a. 'Ah,' Alexander replied. 'Maybe the French told
her to act pregnant and so lengthen her stay in
 Scotland!' (BNCweb, BMN 1864)
 b. Viriden looked, sounded, and acted normal enough.
 (COCA, Camouflage 2011)
 c. And he had looked and behaved like a wild Indian,
 Carew thought with a feeling of wonder.
 (BNCweb, B1X 208)

知覚者・行為者の読み込みに関しても不明瞭な点が残る。上述した(7b)のように、両構文は動作主や知覚経験者の存在が文中に明示されなくても含意されるという共通した特性を持つ。しかし、読み込まれる行為者の存在に関して構文間に相違が見られる。中間構文は総称的で不特定の存在とされる一方、CPV 構文における明示されない知覚経験者は、デフォルトとして話者であると解釈される (Fellbaum 1985, Gisborne 2010, 谷口 2012)。Gisborne(2010: 260-264)の見解のように、話者個人の解釈を示せる CPV 構文は主観的解釈を含んでおり、ゆえに先述した「公共性」からの逸脱が予想される。

以上の証拠から、CPV 構文の特性は生態心理学的動機づけだけでは適切に導き出せないことを提出する。CPV 構文の概念的基盤を正確に捉えるには、中間構文とは異なり、探索活動が必須の要素ではなく、話者（自己）による対象の属性に対する主観的解釈を構築する必要がある。

同時に、二つの構文は性質上いくつかの不一致が見られることも示した。これらについて、両者を比較検討し、並行性・連続性を具体的に考察した研究は、管見する限り存在しない。先行研究では両構文

の並行性に言及はするものの、厳密にどのように連続的なのか分析されて来なかったのである。

本章で指摘した構文間の差異や共通性を裏付けられない要素を踏まえて、次章は両構文の並行性・連続性を改めて分析する。

4. 連続性・並行性の再考

本章では次の図1を用いて連続性を検討する。図1は、前章までの結果をもとに二つの構文の関係性を精査したものである。左から中間構文とCPV構文の事例が並ぶ。また両構文から拡張した事例として「境界的用法」を記した。背景に楕円形が描かれているが、これは生態心理学的分析が適用できる領域を示している。中間構文とCPV構文の一部の用法（例えば(12a)）は、(10)による特性と合致するため、アフォーダンス知覚に動機づけられた表現と言える。しかし、これまでに論じたように、CPV構文はアフォーダンス知覚が十分に反映されていない用法も数多く存在する。すなわち、CPV構文には自己の経験に動機づけられる推論も備わっている。従ってCPV構文は、アフォーダンス知覚の領域内に部分的にのみ及んでいる。これは図内矢印でも表される。

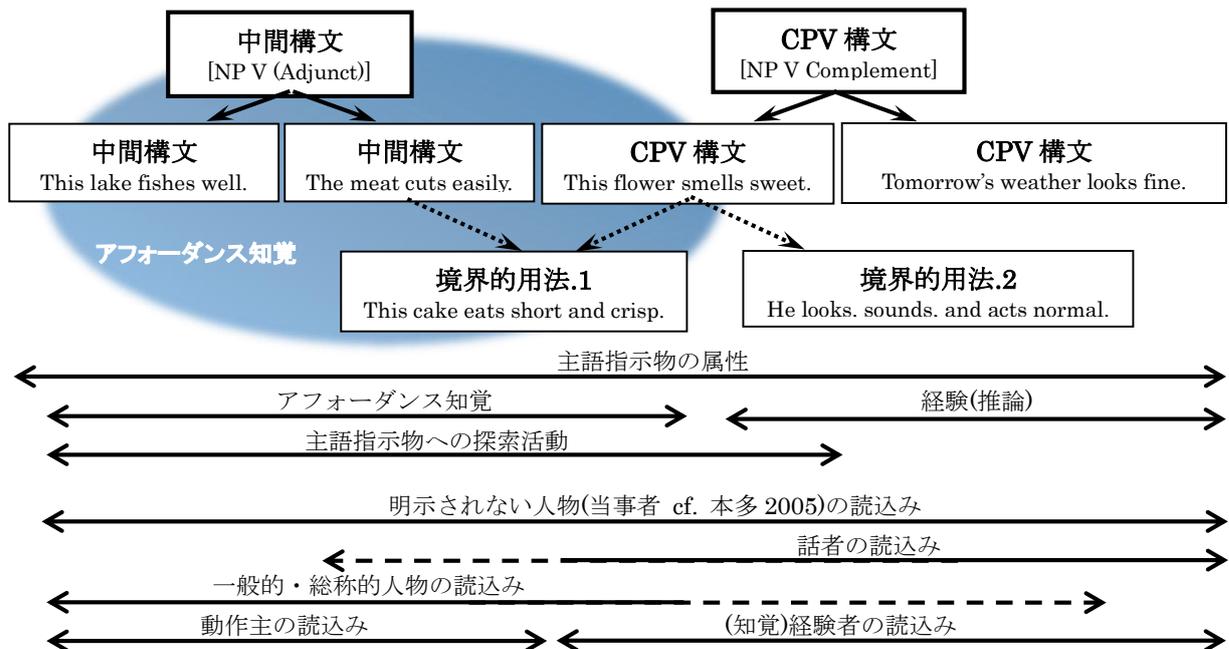


図 1: 中間構文と CPV 構文の連続性

一般的に二つの構文は、主語指示物の属性を表現する共通性を持つといわれる。しかし、詳細に見れば、一部の用法においてアフォーダンス知覚という並行性を保つが、構文間全体に及ぶ並行性は存在しないということが言える。

動詞内に含む探索活動もまた、CPV構文の一部において成立する概念である。また(7b)や(10d)のように、両構文ともに明示されない行為者・知覚経験者が存在すると指摘されたが、その存在の読み込まれ方についても意味役割（動作主・経験者等）やあり方（総称的で不特定あるいは話者）が厳密には異なる。ただし、(6)に示されるように読み込まれ方についてどちらの解釈でもあり得る表現もあるため、これらは決して明確に二分できるものではなく、ゆえに図内の矢印のように重なる箇所も見られる。

以上より、中間構文からCPV構文にわたって、(i)探索活動(動作主性)が薄れ、(ii)総称性が薄れる一方で、(iii)話者の読み込みが強くなり、(iv)直接的な知覚だけでなく話者の経験が基盤となる表現へと連続的に移り変わっていくことが見て取れる。

ところで、CPV構文は何を基盤としているのだろうか。次章でCPV構文の動機づけに「感性」という概念が合致し、二つの構文の相違を動機づける認知的／概念的連続性のメカニズムを明らかにできることを主張する。

5. CPV 構文を動機づける感性

これまで、中間構文とCPV構文における連続性について議論し、両構文は必ずしもアフォーダンス知覚という同一の知覚メカニズムによって動機づけられているわけではなく、CPV構文は話者の推論・経験が含蓄されることを示した。また、本研究の構文現象にて提示した連続性は、アフォーダンスという客観的・公共的な属性と経験に基づく主観的判断が厳格に区分されておらず、連続的に形成されている。Lakoff(1987: 215-217)や本多(2005: 8)が指摘するように、アフォーダンス知覚は経験や文化などが反映される知識構造を認めることに消極的だが、このような言語事実を見ると、Borghini(2005)のようにアフォーダンス知覚を認めながら、経験・知識構造と両

立させることが肝要であると思われる。

例えば、仲本(2006)、深田・仲本(2008)は、形容詞を中心とした属性表現の分析にアフォーダンスの概念だけでなく、フレーム意味論という知識構造を前提とした理論を活用し分析している。仲本らが主張するには、属性表現の概念は客観的に存在しているのではなく、人間と環境との相互作用に基づく「相互作用的属性」として理解されるべきであるという。例えば「重い」という形容詞を理解するには、次の図2.のように「重量がある」という対象の性質(Property)だけでなく、「動かす」活動(運搬フレーム)、そして「(動かそうとすると) 動かしにくい」という主体と環境との相互作用を伴うアフォーダンス(Affordance)が必須であると述べる。



図2: 仲本(2006: 50)による属性表現の分析

このようにアフォーダンスと話者の知識構造を両立させる言語分析がCPV構文でも必要とされる。この際に、「感性」という概念が合致することを示す。次節より、感性について先行研究を概観しながら設定していく。

5.1. 感性の採用

感性について、三浦(2010: 16-23)は「物や事に対して、無自覚的、直感系、情報統合的に下す印象評価判断能力」として、知覚、感覚、認知とも重なる機能を持つ能力としている。また深田・仲本(2008: 115)によれば、アフォーダンスと対照させて、感性は生物にとってある感覚・感情的な反応を引き起こす環境という場であるとされる。さらに桑子(2001: 32)は、環境世界と自己の身体との相関を把握する能力であり、環境とのかかわりのなかで自己の存在をつくり出してゆく能動的、創造的な能力と述べる。

彼らの議論を参考にすると、感性に対して統一的

な見解が敷かれていない。しかし、対象との相互作用から引き起こされる印象・感覚・創造など、自己の能力に焦点が当てられていることが分かる。知覚者が相互作用によって環境に埋め込まれるアフォーダンス知覚とは対照的に、感性は環境の情報を感知した知覚者の判断という形で焦点が当てられ、顕在化する構図を生む。その意味で、感性とは「環境から得られた情報、価値を感知し、自身の経験を背景に引き起こされる感覚・感情を含む印象価値判断の能力」といえそうである。

アフォーダンスに動機づけられた表現とは環境における知覚者と対象の相互作用によって生じた関係を言語化したものである。関係性ゆえに、対象の情報のみならず、自己の情報も同時に理解される。確かに、これによって対象の属性分析に対して有益な手法が投げられたが、それだけでは記号化を動機づける感覚・感情といった心的活動に対する有効な分析手法を組み込むことができない。アフォーダンスという概念を保持しつつも、無自覚・無意識を含む感情などの個別的な性格が反映された言語表現を捉えるには、感性という語が適切である。

本節で扱った感性によって、中間構文とCPV構文における構文間の連続性をどのように説明できるのか次節で考察する。

5.2. 感性による言語分析

本節では、これまでの方策から二つの構文を捉える。図3, 4.に示されるように、中間構文の構文的意味はアフォーダンスを概念化したもので、CPV構文の意味は感性に根付いた概念を指示すると特徴付けられる。つまり、アフォーダンスなどの情報を基に自身の経験を合わせた印象価値判断を表現している。



図3: 中間構文の典型的意味



図4: CPV 構文の典型的意味

CPV 構文はアフォーダンスではなく感性を表していると想定すると中間構文と異なりを説明できる。中間構文よりも特定の事態を表現するのが比較的容易であるのは、話者の印象価値判断が意味の中心であり、それは話者の実際の経験に動機づけられているためである。CPV 構文に内在する暗示的な知覚経験者が話者と読み込まれやすいのは CPV 構文が感性に根付いた表現であることに付随して生じる。すなわち、知覚経験者の価値判断の表れである。先行研究より CPV 構文が「主観的解釈」と言われてきた所以はここにある。また CPV 構文は動詞の探索活動が必須とされないことが明らかになったが、これも感性という立場から説明ができる。CPV 構文はアフォーダンスという知覚者と環境との相補的な関係性を記述するものではなく、知覚者本人の主観的印象に根付いたものであるため、知覚者から対象への能動的な働きかけはそのとき意味の中心にはなっていないのである。

アフォーダンスの公共性・普遍性と感性の個別性によって、両構文の特性に潜む差異を解き明かすことができる。ただし、アフォーダンスと感性は潜在的に明瞭な分割ができるものでもない。従って、構文現象における中間構文とCPV構文は、双方への並行性を保有している。つまり、中間構文が感性的側面を記号化することもあり、一方でCPV構文がアフォーダンスを指示することもある。

例えば、村田(2005)が指摘しているように(24)は「判読できる(legibility)」ではなく「読んで面白い・読みごたえがある(readability)」という解釈を生む表現である。

(24) His essays read well. (村田 2005: 100)



図 5: 感性を表す中間構文

これまでの論考からすれば、(24)は中間構文であり、アフォーダンスに関わる情報を言語化するため、「判読できる」という行為の可能性を示す解釈が予測される。しかし(24)は「文字が読める」ではなく、「読み応えがある」という解釈になる。この原因は、主語指示物と動詞句が持つ知識・経験を統合させた際のズレにあると思われる。

上の図 5. で描かれるように、一見、中間構文内の動詞句のみでは、「判読できる」というアフォーダンスが意味解釈として生じると予期される。しかし、主語指示物‘His essays’に対して我々が有している知識は、「随筆内の文字の羅列」よりも「随筆内の中身・内容」が主要となって構成されている。図 5. 内における Property において、<文字>が点線で囲まれ、<随筆の中身・内容>が実線で囲まれているのは、このことを意図している。図 5. から分かるように、主語指示物に対する知識と動詞句が表さんとするアフォーダンスには不一致が生じており、従って(24)は動詞句の通りのアフォーダンスそのものを意味することは難しい。他方、主語指示物と動詞句の間にある知識間の統合によって、「読んだ結果、内容が面白い」という感性的な側面が解釈される。

このように、中間構文の動詞句の解釈として、アフォーダンスそのものがプロトタイプ的に優先されるが、しかしながら、必ずしも動詞句に対応するアフォーダンスそのものが中間構文の意味になるとは限らない。やや特殊な例だが、(24)のように、主語名詞句に関して我々が持つ百科事典的知識(靱山 2010: 5 etc.)との兼ね合いで、中間構文のなかでも、CPV 構文に近い感性を滲ませる表現も存在する。

CPV 構文も同様である。Gisborne(2010)が分類するところの *Attributory-Use* は、(25)の文を描いた図 6. のように示せる。他の CPV 構文と比較しても分かるように、(25)はアフォーダンス的を言語化す

る。この用法は、暗示された知覚経験者の存在や、事実性の打消しなどに関して中間構文に極めて近い特性を持つ。従って、CPV 構文における *Attributory-Use* は、中間構文との概念的、そして認知的な並行性を保有しているといえる。

(25) This cloth feels sticky.



図 6: アフォーダンスを言語化する CPV 構文

本章では、感性を取り入れて、中間構文と CPV 構文における差異と連続性に関する動機づけを考察した。両構文の特性は以下のように要約できる。(26)によって、これまでに定式化されてこなかった両構文間で見出される言語表現上の並行的・連続的特性とその動機付けが明らかにされる。

(26) a. 中間構文

形式: NP - V (- Adjunct)

意味: 主語指示物が持つ知覚者へのアフォーダンスを表す

b. CPV 構文

形式: NP - V - Complement

意味: 主語指示物と知覚者の相互作用によって生じる知覚者の感性を表す

(26)に示される各構文の意味は中心義であり、その周辺例には(26)内の意味を指示しないこともあるのは、先述した通りである。アフォーダンスと感性によって、普遍性(公共性)と個別性の区分を可能にしているが、ここにおいて明確な境界線は存在しない。従って、区分できない曖昧な境界線上で、両構文には重なる特性も生じている。実際に、CPV 構文は、*Attributory-Use* において特に、中間構文と言語表現上重なる性格をしており、またその逆も然り

であるということを見てきた。概念的側面に至っては、両構文に感性またはアフォーダンスという意味付けを与えている点で、両構文はいずれも相互作用的属性である。つまり、二つの構文が知覚経験を基盤とした相互作用的属性を表すという点は共通しており、両者の特筆すべき並行的性質である。

6. 展望：感性の応用

本稿では、先行研究で特異的と称されてきた中間構文と CPV 構文における連続性と並行性を再検証し、その有り様をより厳密に捉えた。そして、これまでに指摘されていた特性は、各構文間に共有されたものではなく、各構文内における一部分の用法に限って並行していることを明らかにした。

また、アフォーダンスと感性の概念を用いた英語の構文分析も講じた。最後に「感性」という概念について、展望もあわせて触れておきたい。「感性」という観念は認知言語学でもしばしば使用されてきた。しかしながら、山梨(2000: 2)などのように、「感性」という語を用いながら、この語に対する明確な定義付けや、具体的な分析事例は一切扱われなかった。本稿によって「感性」の基礎付けが与えられたと同時に、今後感性のメカニズムを利用した言語分析も可能になる。具体的には、属性表現のほか、感性のメカニズムの普遍性を利用した言語類型論的分析にも期待できる。

謝辞

本稿執筆にあたって貴重なご意見を下さいましたお二方の匿名査読者の先生方に心より御礼申し上げます。また、日頃よりご指導を賜る木内良行先生、早瀬尚子先生に加え、「奈良、ことばの会」にてご意見・ご質問を下さった方々に感謝申し上げます。もちろん、本稿の内容に関する不備はすべて、筆者個人に帰されるべきものです。

<参考文献>

[1] Ackema, Peter, and Schoorlemmer, Maaïke. 2006. "Middles," Everaert, Martin, and van Riemsdijk, Herk (Eds). *The Blackwell Companion to Syntax Volume III*. Oxford: Blackwell Publishing.

- [2] Borghi, Anna, M. 2005. "Object Concepts and Action," Pecher, D, and Zwaan, Rolf, A (Eds). *Grounding Cognition: The Role of Perception and Action in Memory, Language, and Thinking*. 8-34. Cambridge: Cambridge University Press.
- [3] Dixon, Robert. 2005. *A Semantic Approach to English Grammar*. Second edition. Oxford: Oxford University Press.
- [4] Fellbaum, Christiane. 1985. "Adverbs in Agentless Actives and Passives." *CLS* 21. 2 : 21-31.
- [5] 深田智, 仲本康一郎. 2008. 『概念化と意味の世界—認知意味論のアプローチ—』 東京: 研究社
- [6] Gibson, J, J. 1979. *The Ecological Approach to Visual Perception*. Boston: Houghton Mifflin Company. 古崎敬, 古崎愛子, 辻敬一郎, 村瀬旻(訳). 1985. 『生態学的視覚論—ヒトの知覚世界を探る—』 東京: サイエンス社
- [7] Gisborne, Nikolas. 2010. *The Event Structure of Perception Verbs*. Oxford: Oxford University Press.
- [8] 本多啓. 2004. 「認知意味論における概念化の主体の位置づけについて」『日本認知言語学会論文集』第4巻, P.129-139.
- [9] 本多啓. 2005. 『アフォーダンスの認知意味論—生態心理学から見た文法現象』 東京: 東京大学出版会
- [10] Horton, Bruce. 1996. "What are Copula Verbs?" *Cognitive Linguistics in the Redwoods: The Expansion of a New Paradigm in Linguistics*, ed. by Cased, Eugene. H., Berlin and New York: Mouton de Gruyter. 319-346. (Cognitive Linguistics Research 6).
- [11] 桑子敏雄. 2001. 『感性の哲学』 東京: 日本放送出版協会 (NHK ブックス [914]).
- [12] Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press.
- [13] 三浦佳世. 2010. 『知覚と感性』 京都: 北大路書房
- [14] 靱山洋介. 2010. 「百科事典的意味観」 山梨正明(編). 『認知言語学論考 No.9』 東京: ひつじ書房
- [15] 村田勇三郎. 2005. 『現代英語の語彙的・構文的現象』 東京: 開拓社
- [16] 仲本康一郎. 2006. 「属性の意味論と活動の文脈

- 椅子が荷物になるとき—』『日本語・日本文化』第 32 卷, 39-61
- [17] 中村文紀. 2010. 「連結詞的知覚動詞構文と様態制約：知覚者と知覚対象の際立ちの対立から」『日本認知言語学会論集』第 10 号, 438-448, 日本認知言語学会
- [18] Neisser, U. 1976. *Cognition and Reality*. San Francisco: Freeman & Company. 古崎敬(訳). 1978. 『認知の構図』東京：サイエンス社.
- [19] O'Grady, William. D. 1980. "The Derived Intransitive Construction in English", *Lingua* 52.
- [20] Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- [21] 佐々木正人. 1994. 『アフォーダンス —新しい認知の理論』東京：岩波書店
- [22] 谷口一美. 2005. 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』東京：ひつじ書房
- [23] 谷口一美. 2012. 「補語をとる連結的知覚動詞：構文の変化と成立」畠山雄二(編.)『日英語の構文研究から探る理論言語学の可能性』183-195. 東京：開拓社
- [24] 徳山聖美. 2013. 「構文の発達と動詞の認知的分業—連結的知覚動詞構文における *appear* と *look* の分布を中心に—」山梨正明. 他(編)『認知言語学論考 No.11』P.231-269. 東京：ひつじ書房.
- [25] 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』東京：くろしお出版
- [26] Yoshimura, Kimihiro, and Taylor, J. R. 2004. "What makes a good middle? The role of qualia in the interpretation and acceptability of middle expressions in English" *English Language and Linguistics* 8.2: 293-321. UK: Cambridge University Press.

<コーパス>

BNCweb: The British National Corpus.

COCA: The Corpus of Contemporary American English.